九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

この多様なる世界への誘い

2021
九州大学文学部
SCHOOL OF LETTERS, KYUSHU UNIVERSITY

文学部へのお誘い

文学部長
清水　和裕

みなさんは、なぜ文学部に興味を持ちましたか？　小説が好きだから。古い時代に浪漫を感じるから。外国の文化が好きだから。なぜ自分が生きているのかを知りたいから。もしくは、人の心の働きを学びたいから。

そのいずれでも構いません。ぜひ文学部に来て下さい。文学部は、みなさんを、身の回りの関心から、さらに奥深い人文学へと導き、みなさんが想像もしないような学問の世界へ誘います。まずは、自分が好きなことを学びたい、自分が興味があることをやりたい、という気持ちを大切にして下さい。

文学部の学生諸君は、とても生き生きとしています。それは、みな文学部に来たいから。自分の可能性を文学部での勉強にぶつけたいから。そのために文学部を選ぶからです。そして、世間の印象と違い、就職の道も決して狭くありません。それは、そういう選択のできる、意志と意欲を持った学生さんたちの可能性を、社会も高く評価しているからです。

文学部がみなさんに提供する人文学は、人と社会と世界のありかたを解き明かす、とても意欲的で、真に人間存在と向き合う学問です。その人文学を通して、自分を高め、自分の価値を磨き、世界に羽ばたく。そんなみなさんを私たちは待ち望んでいます。

文学部には、哲学、歴史学、文学、人間科学の4つのコース、21の専門分野が存在します。その21の可能性がみなさんに開かれています。是非、勇気と憧れをもって、この世界を訪れて下さい。

SCHOOL OF LETTERS, KYUSHU UNIVERSITY

CONTENTS

文学部へのお誘い
「国際コース」の概要 …… 1
九州大学文学部の特色 …… 2
文学部の構成 …… 4
文学部のカリキュラム …… 6
取得できる資格・国際交流 …… 7
卒業後の進路 …… 8
文学部の授業を覗いてみませんか？ …… 9
哲学コース …… 10
歴史学コース …… 14
文学コース …… 17
人間科学コース …… 21
在学生からのメッセージ …… 24

文学部は、2018年度から「国際コース」を設置しています

次のような点が、従来の文学部とは異なります。

・国際コースの独自入試を実施します（下記参照）。
・1年次に英語インテンシブ・コースの履修を課すなど、国際コースだけの履修要件があります。
・2年次からは、従来の文学部と同じく、哲学・歴史学・文学・人間科学の4つのコースの中の21の専門分野から、1つの専門分野を選んで履修します。
・国際コースの「コース」の概念は、従来の文学部の4つの「コース」とは違っています。
国際コースの学生は、1年次から独自の課程が存在し、2年次から、従来の4つの「コース」に分かれます。
・外国語でなされる授業や、外国語の文献等を対象とする授業の選択が推奨されます。
・留学すること自体が卒業単位として認められています。
・募集人員は10名です。

目的

日本語と複数の外国語に自覚的かつ批判的に関わる中で、人間存在の奥深さへと眼差しを向け、文化・歴史・社会の多様性を認識し、新たな人文学的知の創造に寄与することを目的とします。

趣旨・必要性

文学部には現在、哲学、歴史学、文学、人間科学の4つのコースの中に、合計21の専門分野が存在します。今回国際コースを新設する必要性は、次の2点です。

1.日本語と、複数の外国語に関わる史資料や文献、作品の分析と解釈、および実地調査などを通して、世界や人間の多様性を認識し、直面する課題について理解し、解決に貢献できる能力をもった学生を養成する必要があります。
2.日本の文化・歴史・社会について国際的に発信できる能力をもった学生を養成する必要があります。

具体的には、以下のとおりです。

1.複数の外国語を運用する能力をもった学生の養成

国際コースの学生は、上記21の専門分野のいずれかに属し、専門分野に関する基礎的な技術と方法論を身につけ、それを深めるとともに、複数の外国語による授業、外国語文献を使った授業を履修することで、外国語の基本的な文献を読解する能力と、外国語の運用能力を高めることができます。また、留学を強く推奨し、実用的な語学能力も身につけます。これらの能力は、人文学的知を身につけ、国際的に活躍することを指向するとき、必須のものとなります。

2.日本文化を英語で発信する能力をもった学生の養成

国際コースの学生は、日本の言語文化に関する必修科目（英語による）を履修し、日本の文化・歴史・社会等について、国際的に発信する基礎的な能力を身につけます。この発信能力は、従来の日本人に欠けていた能力です。

入学者選抜方法

総合型選抜

(1) 第1次選抜
・提出された調査書、志望理由書の総合評価により選抜を行います。

(2) 第2次選抜
・第1次選抜の合格者に対し、英語小論文、英語による個人面接（第1次選抜合格者数により、集団面接を行う場合があります）及び大学入学共通テストの成績の総合評価により選抜を行います。

九州大学文学部の特色

沿革

国立大学法人九州大学の歴史は明治36（1903）年にさかのぼります。この春、東京帝国大学、京都帝国大学に続く第三の帝国大学を九州の地に設置するために、京都帝国大学の一分科として京都帝国大学福岡医科大学が設置されたのです。やがて、明治44（1911）年1月1日に九州帝国大学が正式に設立され、文学部は、大正13（1924）年9月に、法文学部の一学科としてスタートしました。

昭和22（1947）年10月、帝国大学令が改正されて、帝国大学は国立大学となり、本学の名称も九州大学と改められました。次いで、昭和24（1949）年4月に法文学部が分離し、文学部が独立しました。また、同年5月には学制改革が行われ、旧制の九州帝国大学は新制九州大学に包括されました。さらに、昭和28（1953）年4月には新制度による大学院が発足し、文学研究科が開設されました。

文学部は設立当初17講座で発足しましたが、その後講座が増設されて、平成12（2000）年には、大学院重点化と研究院制度の発足に伴い、人文学科1学科4コース21専門分野という構成になりました。現在では、21の研究室と50万冊におよぶ蔵書を備え、人文学の拠点としてさらなる発展の機運に満ちています。さらに、平成16（2004）年度からは国立大学法人九州大学に移行し、独立大学法人としての新たなスタートを切りました。

文学部の目的は、文学部を構成する各専門分野を専攻し、それらの分野の知識や研究技術を習得し、それを通じて人間形成をはかることにあります。本学部の卒業生は、昭和3（1928）年以来令和3（2021）年3月までに、旧制1,069名、新制9,379名、計10,448名に達しています。卒業生は、学界、教育界、官界、さらには広く実業界にも迎えられており、現代社会の変化に対応できる新たな人材の育成にも努めています。

文学部の学生受け入れ方針（アドミッションポリシー）

1. 文学部の教育理念

文学部の諸学問の根本は、私たちが用いる言葉を通じて、人間の本質とその営為を探求することにあります。ここで言葉は、単なる情報伝達の手段ではなく、人間の精神文化を培い、表現し、蓄積する知の宝庫を意味しています。言葉に自覚的かつ批判的に関わる中で、人間存在の奥深さへと眼差しを向け、文化・歴史・社会の多様性を認識し、新たな人文学的知の創造に寄与していくことが、文学部の教育理念です。

2. 文学部の教育プログラム

教育の目的

文学部は、各専門領域の研究者である教員と学生とが教育と研究を通して研鑽を行い、人文学的な知識・思考方法を習得する活気に満ちた学部です。教育の目的は、人文学的教養と知性を身につけ、研究や仕事の場で活躍する優れた人材を養成し、社会に送りだすことにあります。

教育課程の特色

文学部は全体を一学科（人文学科）とし、哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースの下に21の専門分野が置かれています。学生は一年間教養教育を受けた後、二年次からいずれかのコース・専門分野に所属し専門分野の講義・演習を受講するとともに文学部の全分野の多様な授業を履修することができます。そして最終的に、自らの関心に従って所属の専門分野からテーマを選び、四年間の勉学の集大成として自力で卒業論文をまとめなければなりません。

また、国際コースでは、一年次に独自の英語を重視した教養教育を受け、二年次からは国際コース以外の学生と同様にいずれかのコース・専門分野に所属するとともに、国際性を重視した独自の授業を履修します。

人文学科の各コースの内容

■ 哲学コース

哲学コースは、哲学・哲学史、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、美学・美術史の5専門分野から構成されています。東西の文化的伝統の中で人類が生み出してきた様々な精神的所産――哲学・思想・宗教・芸術にかかわる文献や作品――を、厳密かつ真摯に読解し、また思索することを通して真理の探求を行います。人類は東西の様々な文明圏において、多様な宇宙観・世界

観・人間観・生命観・倫理観を創り出し、各時代を通じてそれを展開させてきました。また、生と死・老いと病いを見つめることで、各種の宗教を生み出し、信仰の諸形態を作り出してきました。さらに崇高なるものを希求して豊かな美の世界を展開してきました。哲学コースを構成する各専門分野では、人類が生み出してきたこれらのものを、現代が抱える諸問題――環境問題・生命倫理・民族問題など――をも視野に入れて、主として文献と資・史料に基づいて研究しています。

■ 歴史学コース

歴史学コースは、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明学の6専門分野から構成されています。歴史学は、過去の探求と現代の認識との――さらには未来への見通しとの――間の相互対話の中でなされる精神的営みです。つまり、現代社会の成り立ちへの関心、現代とそれ以前の「異文化」社会との異質性・同質性への関心を重視する学問です。本コースは、特定の地域と時代における社会（経済・政治・文化の総体）の特質と相互間の共通性を、批判精神をもって実証的に、また理論的に解明することに主眼をおいています。具体的には、先学の著作を批判的に読む中で自らの問題点を鍛え直してシャープなものとし、次いで、自ら直接に史・資料を解読し史跡を調査することにより、自らの視覚から、ある特定の地域と時代の社会像を復原することが求められます。この過程で、人間精神の多様性を認識するセンス、論理的思考力と独創性が養われることが期待されるのです。

■ 文学コース

文学コースは、国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学の5専門分野から構成されています。日本・中国・英米・独・仏の言語や文学を研究するコースで、それぞれ古典から現代までの、具体的かつ多様な文学作品（詩・小説・戯曲・思想的著作・批評など）を精査解読し、作品の背景をなす文化や、さらには文学そのもの（ないしは、いわゆる「文学性」）について省察を行います。本コースでは、日本語・中国語・英語・独語・仏語など言葉そのものを研究対象とすることもできます。また、外国文学系の専門分野にはいずれもそれぞれの言語を母語とする教員が配置され、生きた外国語による授業が行われています。

■ 人間科学コース

人間科学コースは、言語学・応用言語学、地理学、心理学、比較宗教学、社会学・地域福祉社会学の5専門分野から構成されています。人間を科学的に研究するコースで、地域を含む社会と人間との関係の中から問題を発見し、仮説を立て、それを実験・調査・フィールドワーク、統計解析により実証するという実践的調査研究を行っています。人間の行動や心理、さらに個人と社会の相互作用にも関心を寄せ、いわば人間・社会研究の視点から教育・研究を進めており、現代社会のさまざまな現象を包括的に把握して、産業化、情報化、高齢化、国際化などをめぐって生じる問題の解決にも取り組んでいます。言語学、地理学、心理学、宗教学、社会学といった学問領域からなる本コースには独自の学問研究の成果が期待されています。

3. 文学部の求める学生像

文学部では、自ら問題を見出し、筋道を立てて思考し、精確に表現できる学生の育成を目指しています。そのためには、自ら調査、読書し、他の人々と対話しつつ自らの考えを発展させていく姿勢が大切です。それゆえ、文学部で学ぼうとする者は、何よりも次の三つの資質を備えていることが望まれます。

1. 言葉への強い興味。とりわけ、文学作品や古典に対する感受性
2. 人間への飽くなき好奇心と、「私とは何か?」という真摯な問いかけ
3. 文化・歴史・社会といった、世界の多様性への開かれた関心

さらに、国際コースの学生には、特に次のような資質を備えていることが望まれます

1. 日本語と、複数の外国語への強い興味、ならびに文学や思想に対する感受性
2. 世界の多様な文化・歴史・社会への開かれた関心
3. 将来国際人として活躍することへの意欲

4. 入学者選抜の基本方針

文学部は高等学校の教育課程を尊重し、受験生の基本的知識、論理的思考力、表現能力を重視しています。大学入学共通テストにおいては、幅広い基本的知識の習得を見るため、国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語を課しています。一般選抜（前期日程）においては、より深い知識と論理的思考力を見るため、国語・数学・外国語・地理歴史を課し、主にマークシート方式である大学入学共通テストを補完する形で記述式の問題を中心に出題しています。また、主体性等を評価するために、調査書を利用しています。一般選抜（後期日程）においては、論理的思考力と表現能力を見るためと、文学部を選んだ動機、いかに学び、それを将来いかに役立てるかを問うための2種類の小論文を課しています。総合型選抜（国際コース）においては、日本語と、複数の外国語への強い興味、ならびに文学や思想に対する感受性、世界の多様な文化・歴史・社会への開かれた関心、将来国際人として活躍することへの意欲などの資質を見るために、志望理由書、英語小論文、英語による個人面接を課しています。

文学部の構成

文学部は人文学科1学科から成り、人文学科は哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースに分かれています。各コースはさらに、合計21の専門分野に分かれ、それぞれの専門分野では2〜6名の教員・外国人教師によるきめ細かな教育が行われています。

哲学コース

哲学コースには、哲学・哲学史、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、美学・美術史の5つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
哲学・哲学史	倉田　剛 教授 大西　克智 准教授	哲学基礎論 西洋哲学史
倫理学	横田　理博 教授 吉原　雅子 准教授	近現代ドイツ思想、近代日本思想、比較思想 現代倫理思想
インド哲学史	岡野　潔 教授 片岡　啓 准教授	インド仏教文献学 古典インドの宗教・思想・文化
中国哲学史	南澤　良彦 教授 藤井　倫明 准教授	中国古代中世思想史 中国近世近代思想史
美学・美術史	井手誠之輔 教授 東口　豊 准教授 伊藤　拓真 准教授	東洋美術史 近現代美学、音楽美学 西洋美術史、美術批評史

＊上記以外に大学院人文科学研究院広人文学講座の外国人教員が文学部において日本文化に関する講義を英語で開講しています。

歴史学コース

歴史学コースには、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明学の6つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
日本史学	岩﨑　義則 准教授 国分　航士 講師	日本近世史 日本近現代史
東洋史学	中島　楽章 准教授	中国近世史・東アジア海域史
朝鮮史学	森平　雅彦 教授 小野　容照 准教授	朝鮮中世・近世史、東アジア交渉史 朝鮮近代史
考古学	宮本　一夫 教授 辻田淳一郎 准教授	東アジア考古学 日本考古学
西洋史学	岡崎　敦 教授 今井　宏昌 講師	フランス中世史 ドイツ現代史
イスラム文明学	清水　和裕 教授 小笠原弘幸 准教授	アラブ史、初期イスラム史 オスマン帝国史

文学コース

文学コースには国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学の5つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
国語学・国文学	青木　博史 准教授 川平　敏文 准教授 岡田　貴憲 准教授	日本語史 近世文学 中古文学
中国文学	静永　　健 教授 井口　千雪 講師 段　　天姝 講師	中国古代文学 中国中近世文学 中国古代文学
英語学・英文学	西岡　宣明 教授 鵜飼　信光 教授 高野　泰志 准教授 テッド・クロンツ 准教授 エドムンド・ルーナ 准教授	英語学 イギリス文学 アメリカ文学 アメリカ文学 英語学
独文学	小黒　康正 教授 武田　利勝 准教授 ウルリヒ・ヨハネス・バイル 教授	ドイツ近現代文学 ドイツ古典文学・近代文学 ドイツ近現代文学
仏文学	高木　信宏 教授 シャルレーヌ・クロンツ 准教授	フランス近代文学 フランス現代文学

人間科学コース

人間科学コースには、言語学・応用言語学、地理学、心理学、比較宗教学、社会学・地域福祉社会学の5つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
言語学・応用言語学	久保　智之 教授 上山あゆみ 教授 下地　理則 准教授 太田　真理 講師	音韻論、形態論 生成文法および日本語統語論 琉球語、日本語諸方言、言語類型論 言語脳科学、心理言語学
地理学	遠城　明雄 教授 今里　悟之 准教授	人文地理学、都市研究 人文地理学、村落研究
心理学	中村　知靖 教授 光藤　宏行 准教授 山本健太郎 講師	計量心理学、心理測定学、テスト理論 知覚心理学、視覚科学 実験心理学、時間知覚
比較宗教学	飯嶋　秀治 准教授 高橋沙奈美 講師	文化人類学、宗教民俗学 宗教社会学、地域研究
社会学・地域福祉社会学	安立　清史 教授 高野　和良 教授 山下亜紀子 准教授	福祉社会学、ボランティア・NPO 論 地域福祉社会学 家族社会学、福祉社会学、地域社会学

文学部のカリキュラム

特色あるカリキュラム

九州大学の授業科目は、大きく基幹教育科目と専攻教育科目とに分けられ、両科目は有機的な連関のもとに4年一貫の教育として行われています。このうち、専攻教育科目は各学部ごとに行われるものであるのに対して、基幹教育科目は全学的に協力して一体となって実施されています。基幹教育科目は、学部専攻教育ならびに大学院での学習へとつながる勉学意欲をつくりだし、そこでの効果的な学習を可能にする幅広い範囲の基礎的な能力を培う役割を持っています。

文学部では、基幹教育科目48単位以上、専攻教育科目80単位上、合計128単位以上を修得しなければなりません。専攻教育科目は、学部全体の共通科目である文学部コア科目（人文学科基礎科目、人文学科共通科目および古典語・外国語科目で構成されています）9単位以上、各コースの共通科目であるコース共通科目8単位以上、それぞれの専門分野科目26単位以上、これらの科目の中から自由選択科目27単位以上、さらに卒業論文10単位を修得しなければなりません。

1年次は基幹教育科目を中心とした履修になりますが、専攻教育科目として人文学科基礎科目を修得することができます。2年次からは、さまざまな専攻教育科目を履修することができ、最終年度の4年次には、卒業論文を作成し提出しなければなりません。さらに、これら専攻教育科目に加えて、中学校又は高等学校の教員免許状取得、学芸員の資格取得、社会調査士、認定心理士の資格取得のための授業科目や、公認心理師及び宗教文化士の受験資格取得のための科目も開講されています。以下に標準的な履修科目と時期を示します。

標準的な履修方法

	1年次	2年次	3年次	4年次
基幹教育科目（48）	基幹教育セミナー（1） 課題協学科目（2.5） 言語文化科目（12） 文系ディシプリン科目（10） 理系ディシプリン科目（5） サイバーセキュリティ科目（1） 健康・スポーツ科目（1） 総合科目（フロンティア科目）（1） その他（12.5）	高年次基幹教育科目（2）		
専攻教育科目（80）	人文学科基礎科目（4）	人文学科共通科目（2） 古典語・外国語科目（3）		
		コース共通科目（8） 専門分野科目（26） 自由選択科目（27）		卒業論文（10）
その他		教職科目 学芸員科目 社会調査士取得のための科目 認定心理士取得のための科目 公認心理師受験資格取得のための科目（※※） 宗教文化士受験資格取得のための科目		
備考	入学	専門分野決定		卒業

※括弧内の数字は最低必修単位数を示す。

※※公認心理師受験資格取得には、文学部に加えて大学院修士課程での所定の科目の履修が必要となります。

取得できる資格・国際交流

取得できる資格

文学部人文学科では、卒業までに「それぞれの資格毎に定められた基礎資格と所要単位」を修得すれば、以下のような免許状や資格を取得することができます。（公認心理師及び宗教文化士は受験資格の取得です。）

【文学部で取得可能な資格一覧】

	概　　要
中学校教諭 一種免許状	中学校における「社会」、「国語」、「英語」の教員免許
高等学校教諭 一種免許状	高等学校における「公民」、「地理歴史」、「国語」、「英語」、「独語」、「仏語」及び「中国語」の教員免許
※免許の種類毎に必要な単位を修得し、教育委員会に申請すれば、卒業時に教員免許状を取得することができます。その後、大学院人文科学府修士課程に進学して所定の単位を修得すれば、「専修免許状」を取得することができます。（卒業・修了後、実際に学校の教員になるためには、「教員採用試験」に合格する必要があります。）	
学芸員	学芸員とは、博物館法に基づく専門職員で、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究、その他これに関連する事業の専門的事項を担当する職員です。
社会調査士	現代の社会では、新聞社等の世論調査や社会調査の結果が情報として私達に伝えられています。「社会調査士」とは、このような社会調査を行う専門職として、一般社団法人社会調査協会が認定するものです。
認定心理士	「心理学の専門家として仕事をするために必要な心理学のミニマムエッセンス（最小限の標準的基礎学力と技能）を修得している」と社団法人日本心理学会が認定するものです。
公認心理師	心の健康問題に対して、保健医療・福祉・教育など他職種の関係者と連携しながら心理に関する支援を行う国家資格です。大学において指定の科目を修め、かつ、大学院においても指定の科目を修めその課程を修了した際に受験資格が得られます。
宗教文化士	現代社会において国際的に親交を深めるためには他の宗教、異文化の理解が必須です。宗教文化士は宗教文化推進センターが認定するものです。

国際交流

日本の国際化の進展とともに、文学部・大学院における国際交流も年々活発化し、教員や院生・学生の交流が盛んに行われています。現在、文学部および大学院人文科学府には15カ国、67名の外国人留学生が在籍しています。このうち中国・韓国・台湾からの留学生が8割以上を占め、他は欧米・南米・中東の諸国などとなっています。一方、4名の日本人学生が文学部および大学院人文科学府から外国に留学しています。さらにまた、教員の外国出張や海外研修も頻繁に行われていることに加え、英語学・英文学、独文学、仏文学、中国文学の各研究室には外国人教師が配置されていて、ネイティブ・スピーカーによる教育・研究が行われています。

文学部と学部間の学術交流協定を結んでいる外国の大学は、現在、ケンブリッジ大学東洋学部（イギリス）、東義大学校人文大学（韓国）、昌原大学校人文大学（韓国）、ルール大学ボーフム歴史学部・東アジア研究学部（ドイツ）及びヘント大学（ベルギー）の5校があります。また、大学間学術交流協定を結んでいる大学には、ボルドー大学（フランス）、中山大学（中国）、北京大学（中国）、ソウル大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、アリゾナ州立大学（アメリカ合衆国）、バーミンガム大学（イギリス）、ミュンヘン大学（ドイツ）などがあり（2020年6月現在で35カ国・地域、148機関）、国際交流の大きな礎となっています。

さらに、考古学研究室と釜山大学、中国哲学史、中国文学研究室とソウル大学など、各研究室の交流も盛んであり、訪問研究員も絶えず受け入れています。これ以外の研究室においても、外国人研究者を招いて講演やシンポジウムが毎年開催されていて、活発な国際交流が行われています。

日本が世界に占める位置、なかんずく九州大学文学部がアジアに占める地理的、歴史的環境から、今後アジア近隣諸国をはじめ、欧米を含む世界各国との国際交流が盛んになることが期待されます。

卒業後の進路

卒業後の進路

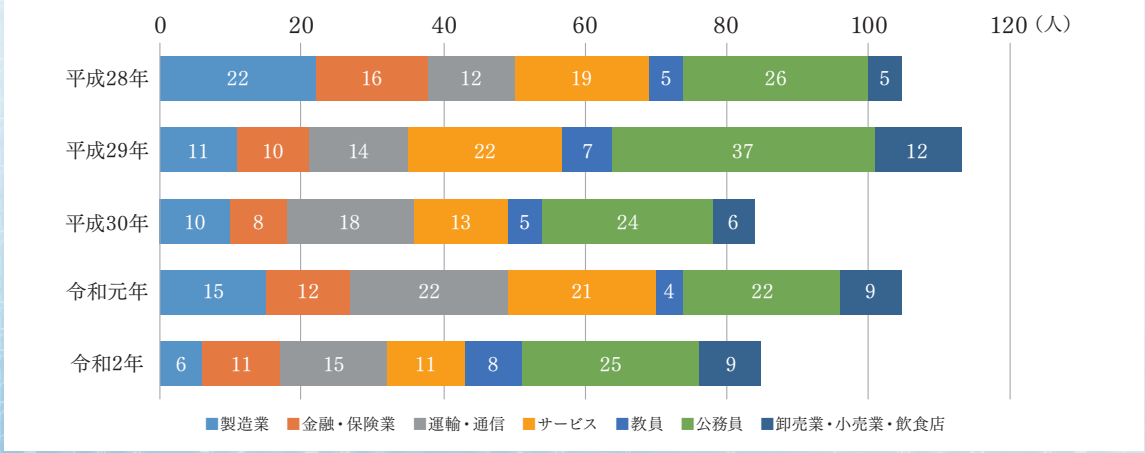
九州大学文学部には、毎年約160名の卒業生がいます。そのうちのおよそ60%が就職し、およそ20%が大学院に進学したり、大学院の進学をめざして研究生や聴講生として大学に残ります。卒業時に就職を希望している者の大多数は、企業や官公庁に就職したり、高校や中学の教員になります。過去7年間の就職者数を産業別に示すと下の表のようになります。

九州大学文学部は大学院博士課程をもち、学部教育よりも大学院教育を主とする、一般の大学とは異なって研究者養成を重視する学部です。そのため、3年生や4年生になると、「大学院に進んで研究をさらに続けるか、それとも就職するか」という悩みを、多くの学生が抱きます。また、就職を考えるためには、3年生になったときにはすでに、かなり明確な目的意識をもっていることが必要でしょう。大学院に進学するにせよ、企業や官公庁などに就職するにせよ、重要なのは、「自分のやりたいことは何か」という積極的な意欲を持つことです。

大学は、そして文学部は、わかりきった答えや知識を与える場ではありません。あなた方ひとりひとりが、問題を見つけ出し、それに答えるために自発的に学問するための場です。学生と教員が一緒になって学問と研究を行う場所なのです。積極的で好奇心旺盛な人を求めます。

【学部卒業生の産業別就職者数】

項目 / 年度	就職決定者数（人）						
	製造業	金融・保険業	運輸・通信	サービス	教員	公務員	卸売業・小売業・飲食店
平成28年度	22	16	12	19	5	26	5
平成29年度	11	10	14	22	7	37	12
平成30年度	10	8	18	13	5	24	6
令和元年度	15	12	22	21	4	22	9
令和2年度	6	11	15	11	8	25	9



文学部の授業を
覗いてみませんか？

大学では自ら考える力が求められます。
考えることは問いかけからはじまります。
先人の智恵にならい、あるいはフィールドの現場から、問いを発し、考えを深めていくことが大切です。

小さな世界の中に大きな宇宙がおさまっていることもあります。
何気ない身の回りの日常が、不可思議な世界へと変貌することもあるでしょう。
専門を深めることは、決して他の分野の学問と無関係ではありません。

いろんな問いを結びつけ、知的冒険に旅立つのは、皆さん自身です。
先人たちの遺した文字や資料は、新たな世界へのよき道案内となるでしょう。
扉を開いて私たちと一緒に旅をしてみませんか。

つねに物事の根本に立ち戻り、世界をひとつの全体として思考する

哲学とは何か

倉田　剛（哲学・哲学史）

哲学とはいったいどんな学問なのでしょうか？何やら難しそうな学問だというイメージはあったとしても、**「哲学とは何か」**という問いに答えられる人はそれほど多くないはずです。実は、哲学者たち、あるいは哲学研究者たちにとっても、この問いは決して簡単に答えられるものではありません。

私自身、大学で哲学を研究し教える身でありながら、ふいに誰かから「あなたの専門分野の哲学とは何をする学問なのか？」と問われると、しばし考え込んでしまいます。結局まとまりのない話をして、相手に煙たがられた末に、「簡潔で差し障りのない答えをあらかじめ準備しておけばよかった」と後悔することもあります。

しかし、哲学にはそうした**風変わりな側面**があることは否定しがたいように思われます。つまり、哲学者にとっても、「哲学とは何か」は自明ではなく、それはたえず問いつづけられる問いとして残されているのです。これは「〇〇学とは〇〇について研究する学問だ」と即答できるような他の多くの学問とやや異なる点かもしれません。もう少しまともな言い方をすれば、哲学は、つねに自らの規定自体に意識を向けつづけるという意味で、すぐれて**「自己反省的」**な学問なのです。

とはいっても、私はこの文章を、これから文学部で学ぼうとする人たちに向けて書いていますので、以下では、「哲学とは何か」についての私自身の見解を、不完全な仕方ではありますが、述べておきたいと思います。

ある偉大な哲学者はかつてこのようなことを言いました。

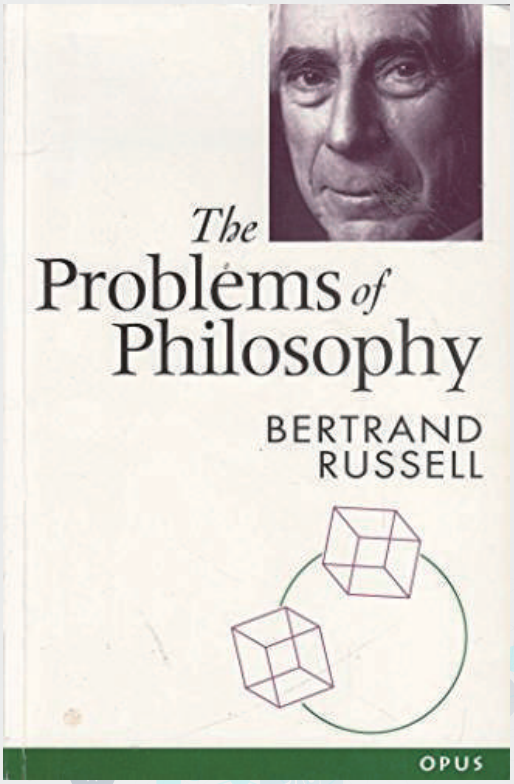
▲東プロイセンの偉大な哲学者エマニュエル・カント（1724-1804）の像

「哲学は教えることができない。教えることができるのは**哲学すること**だけである」。私はこの言葉を次の意味で理解することにしています。すなわち、哲学を学ぶときに重要となるのは、既成の知識を習得することではなく、**哲学的な態度**、言い換えれば、**つねに物事の根本に立ち戻り、世界をひとつの全体として思考する態度**を身につけることである、と。

哲学は、現在大学で学ぶことのできる学問の中で、**もっとも歴史が古いもののひとつ**です。しかし、よく知られているように、近世・近代と呼ばれる時代になると、**多くの「新しい学問」が哲学から袂を分かっていきます。**17世紀には自然哲学から「自然科学」（物理学）が分化し、18世紀には道徳哲学と経済学はそれぞれ別の道を歩みはじめ、さらに19世紀に入ると、様々な「人間科学」・「社会科学」（心理学や社会学など）が、相次いで哲学からの独立を宣言します。今日、これらの諸科学は高度に専門化された知識の体系を築き上げ、ミクロな素粒子から広大な宇宙の成り立ちに至るまで、あるいは私たちの心のメカニズムから社会の仕組みに至るまで、とても精緻な説明を与えてくれます。また、それらは未来に生じる事象をある程度の確度で予測する能力をもち、場合によっては、それを制御する力も有しています。こうした「力」を前にして、私たちは、科学に揺るぎない地位を与え、科学抜きには立ちゆかない時代を生きることになりました。

こうした時代において、多くの科学の母体となってきた哲学は、その役目を終えてしまったのでしょうか？哲学は、過去の偉大な哲学者たちがのこした言葉をたんに語り継ぐといった、「骨董的な価値」しかもちえないのでしょうか？**そんなことはありません。**なぜなら、たとえ科学が発展を遂げたとしても、いやむしろ発展すればするほど、そこに**哲学的な難問が立ち現れてくる**からです。宇宙の起源に関する壮大な理論は、観測された証拠（エビデンス）が仮説を確証するとはいかなることかという問いを誘発します。脳科学の発達は、従来の「心」の概念をどう捉えなおせばよいのかという問いに結びつきます。遺伝子工学を応用して、特定の病気に罹りにくい人間をつくり出すことは、私たちを幸せにするのかという難問も、科学の発展から生じたものです。また、経済学が前提してきた「合理的な経済主体」、つまり自己の効用の最大化を目指す人間像は維持できるのかといった問いも真剣に問われなければなりません。これらはいずれも、**物事の根本に立ち返らなければ答えられない問い**であり、また、世界の特定の領域にとどまっていては答えられない問い、言い換えれば、**世界をひとつの全体として捉えようとする態度なくしては答えようのない問い**なのです。これこそが、まさに私の言う「哲学の問い」です。

この文章を読んで、これから大学で学ぼうとする皆さん方の哲学についてのイメージは、わずかながらでも豊かになったでしょうか？私はそう期待します。しかし、「哲学とは何か」という問いに納得のいく答えを見いだすことができるのは、**最終的には、皆さん方一人ひとり**だと思います。私は、伊都キャンパスの研究室や教室で皆さん方と議論できることを楽しみにしています。



▲イギリスの哲学者バートランド・ラッセル（1872–1970）の『哲学の諸問題』（初版は1912年）。優れた数学者・論理学者でもあったラッセルは『プリンキピア・マテマティカ』（ホワイトヘッドとの共著、1910–1913）により現代数理論理学の領域に金字塔を打ち立てた。またラッセルは、第一次世界大戦に対する非戦論の主張でケンブリッジの教授職を解任され、投獄されたほか、第二次世界大戦後には核兵器廃絶運動にも積極的に関わり、自らが起草した「ラッセル＝アインシュタイン宣言」（1955）を発表したことでも知られる。

美術を考える

文学部では、もっぱら文字で記されたテクストを研究する。そんな一面的な思い込みをしていないだろうか。
文学部には、絵画や彫刻といった美術品や遺跡や考古遺品といったモノを対象とする研究分野もある。
さらに踏み込んで、美術とは何か、アートと美術はどこが違うのか、と考えてみるのもいい。
学問の根拠を問い直すことでさまざまな議論の視界が開かれていく。それも人文学に共通する醍醐味である。

文学部はテクストだけでなくモノも研究します

井手　誠之輔（美学・美術史）

仏像は美術といえるのか。書や工芸は、どうして美術史では長らくマイナーだったのか。どうして古いものにより価値があるといえるのか。美術のまわりでは、ふつうに納得できないことが意外に多い。1990年を前後する頃から日本における美術史学では、100年間にわたる学問の歩みについて厳しく自省を迫り、こうした問いかけにようやく回答を見出してきた。美術をめぐる制度論と呼ばれる議論がこれにあたる。

自明とされてきた美術という言葉や概念は、もともと日本をはじめ中国や韓国などの漢字文化圏には存在していない。じつは、明治になって西洋の近代文化を受容する過程でドイツ語からの翻訳語として生まれ、その後、成長を遂げてきた。美術館に行くと、作品に触れることは禁止され、沈黙を強いられる。モノとの対話から触覚と聴覚を奪い、ひたすら視覚の対象としてのみ鑑賞する。これが美術をめぐる制度の正体である。

美術は近代における歴史的な産物である。この議論は、目前の美術品には、美術以前の歴史や美術以後の歴史もあるという自覚をうながし、いわゆる古美術の研究者にも画期的な意義をもたらすことになった。美術をめぐる制度は、文化財保護のための法律や美術館や博物館などの展示施設、美術団体や学会組織などにとどまらず、作り手や語り手による言葉を使った作品記述や歴史観・思考法の全てに及んでいる。こうした有形無形にわたるさまざまな制度の下で、私たちは美術を信奉し享受してきたのである。

制度論というと何か難しいかもしれない。それならば、近代以降、美術という色眼鏡をつけて作品に対峙してきたと考えてみよう。西洋風の真新しい色眼鏡をつけて仏像を美術とみなし、西洋の物差しにあわせて彫刻や絵画が美術の主要なジャンルに再編され、その歴史が語られてきたことになる。色眼鏡をはずし、あるいはレンズの歪みを補正すれば、正しく対峙できるのか。しかし、それは決して簡単ではない。美術の色眼鏡をはずしたら、たとえば宝物のような、もっと古い色眼鏡の存在に気づかされるかもしれないからである。古い時代を立派と考える儒学や国学の制度も干渉しているに違いない。制度からの真なる決別と自由の自覚は、出家して修行を続けた人のみが到達できる境地にしかない。そうならば、**私たちは、さまざまな有形無形の制度に不断に染め上げられる中で、生きている**と心得ていた方がいい。

▲国宝　木造薬師如来像　平安時代初期
像高50cm　奈良国立博物館なら仏像館
（旧京都・熊野若王子神社御正体）
出典：国立博物館所蔵品統合検索システム

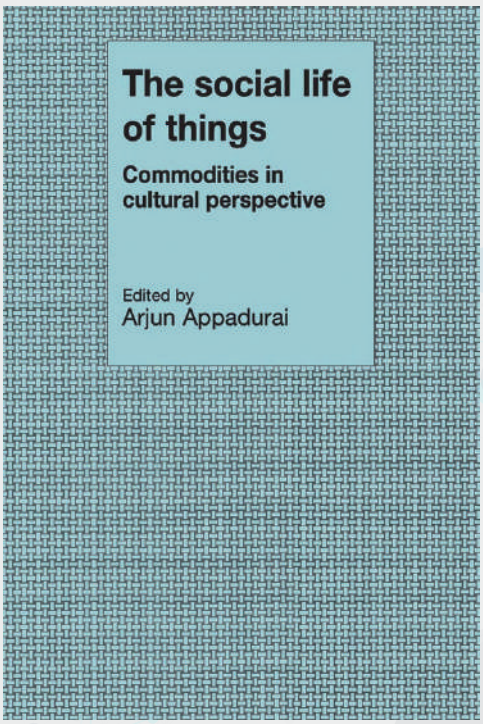
今や日本は、かつて憧れた仏蘭西国を凌ぐほどの美術愛好国となった。しかし、若い世代の学生には、美術よりは、カタカナ表記のアートの方がより身近に感じられるのではないだろうか。モノとの対話に触覚や聴覚の役割がとりこまれ、特権化されてきた視覚の役割は、相対的に後退している。その意味で、私たちは、美術からアートへの変わり目の時代に居合わせていることになる。

仏像は、美術以前からのさまざまな制度の痕跡を、さながら映し鏡のように宿してきた。祈りの対象として誕生した仏像が、その霊力を維持するために秘仏とされることがある。やがて寺院の開創や由緒の神話を証す宝物になり、近代には美術品として公開され四方からの視線に曝される。時として故郷から美術館へと住処を移す運命にさいなまれる場合もある。いずれアート展と称して、今日的に仕立てなおされた空間に、仏像と祈りを込める儀礼とを結びつけて展示するという企画が出現するのでは、と予想する。

変な譬えかもしれないが、**モノにも、人と同じような社会生活の歴史がある。**そう考えてみると意外と視界が広がって面白い。モノには、その社会的な意味や機能を変化させながら、今日までの歴史が宿り、年輪のように刻みこまれている。多種多様なモノを擬人化して、その移動や離散、経済的な活動にともなう交換や消費、文化的資本としての価値付けの歴史を語る議論が、じつは、今、盛んになりつつある。美術をめぐる制度論から生まれた作品誌や、交易品のグローバルな展開から着想されたモノの社会生活（social life of things）は、いずれも日本の美術史学や欧米の文化人類学を源とする新しい考え方である。今後、物質文化論（material culture）などの議論とも結びついてさらに展開されていく感がある。

近年、人文学や社会科学系の学問において、専門性を超えた柔軟な思考が大学の学部時代から求められている。多様な学問のそれぞれの根拠を問い直すことで、新しい議論の視界が開かれていく。それも人文学に共通する醍醐味であり、文学部の大きな魅力である。

▲米倉迪夫著『源頼朝像―沈黙の肖像画』
絵は語る4　平凡社　1995年
作品誌の提唱者による本。その記述は、作品誌の醍醐味を知るためのバイブルとなっている。



▲Arjun Appadurai, *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective,*
New York: Cambridge University Press (1986).
モノの社会生活の嚆矢となる本。アパデュライはインド生まれの文化人類学者。

過去と現在との対話

「年表を暗記するのが嫌いなので、歴史は苦手だ」と思っている人もいるでしょう。
大丈夫、大学の歴史学は、そのようなことは要求しません。
研究室で、皆さんの先輩がやっていることを紹介してみましょう。

モノを見つめる意味

宮本　一夫（考古学）

人類は創造によって他の動物に比べ秀でた高度な文明社会を築いたといわれる。その文明社会においても、様々なひずみが我々の現代社会を脅かしている。

人類の創造は物質文化によく反映されており、創造の産物が無機物の物質として残っていく。これが遺物である。遺物は社会や歴史の様々なコンテクストを反映しており、技術的な進歩を含む社会進化の過程を示している。また、同時に人間の創造がどのような原因や理由によって生み出されたのかを考える必要がある。一方、物質文化は形而下の世界であるが、この物質からこれを形作った人間の思考や思想・宗教のような形而上世界を垣間ることも可能である。

また物質文化において物質は単独に存在するのではなく、空間上有機的な関連性が存在している。こうした空間的な関係性が現在に残っているものが、遺構や遺跡である。遺跡は人間社会の歴史を反映しているだけでなく、自然や環境の歴史をも反映している。遺跡を通して、**人間と社会、人間と自然のあり方を考える**ことができる。こうして我々の現代社会を過去から見つめ直すことができ、人間そのものを問い直すことができるのである。

紀元前1500年頃の青銅器時代墓地の調査
（モンゴル国アブダライ遺跡）

6世紀の古墳の調査（福岡県桂川町天神山古墳）

紀元前5～4世紀の弥生時代前期の壺（福岡市藤崎遺跡）

過去は誰のものか

岡崎　敦（西洋史学）

いま世界には、歴史教育、文化遺産問題から、民族、宗教紛争まで、**「過去と現在の対話」を必要とする課題が満ちています。**

日本では、「歴史」の勉強として当然と考えられている「世界史」は、世界的には珍しい存在です。どの国でも、「歴史」は、学校の科目では、普通一つしかないからです。私たち日本人は、なぜ「世界史」を「日本史」とは別に学んでいるのでしょうか。あるいは、そもそも「世界史」とは何なのでしょうか。

九大文学部が、2018年に移転してきた伊都キャンパスのイーストゾーンは、古墳を破壊して整備されたものです。この古墳は、なぜ、吉野ヶ里遺跡のように保存されなかったのでしょうか。ユネスコには「世界遺産」が、世界の各国には「文化財保護法」なる法律がありますが、「保存されるべき遺産」とは、誰がどのような基準で決めているのでしょうか。保存のための経費は誰によって負担されるべきなのでしょうか。

私たちは、個人としても、集団としても、自分（たち）とはなにかという問いを自らに投げかけながら生きています。その際しばしば参照されるのが、比較の対象としての「他者」であるとともに、「自分たちの過去」でしょう。ところで、「自分たちの過去」とは、いったい何なのでしょうか。縄文時代に日本列島に住んでいた人々は、現代の日本国籍人の「祖先」なのでしょうか。あるいは、すっかり「西洋化」している現代日本人にとって、「西洋文明」は、「自分たち」のアイデンティティには無縁なのでしょうか。そもそも「過去」とは誰のものなのでしょうか。

「過去と現在との対話」は、多様で複合的な諸文化の中に生きる現代人が、互いを尊重しながら、豊かな社会生活を送るためにこそ必要とされています。そのためには、さまざまな伝統に属する人々の間で、確かな証拠に基づき、平和的な対話がなされる「公共空間」が必要です。

歴史学は、「過去について考える」学問です。そこでは、過去についての「確かな」知を提供する知的冒険が日々実践されていて、その意味では、自然科学をはじめとする、学問全般となんら変わるものではありません。

同時に、**「歴史的な知」は、世界や個々の社会がかかえる諸課題を、さまざまな専門家の知恵を糾合しつつ、社会全体で考えていくために必要不可欠です。**「過去は誰のものか」という問いは、教育、マスコミやSNS空間を始めとする社会生活全般、さらにはグローバル化のなかでの国民国家の地位など、政治、経済的領域にも関係しているのです。

九大歴史学では、歴史学の専門的な研究、教育が、アカデミズムのなかだけではなく、**広く社会全般において役立つこと、また、そのために貢献する人材の育成**を目指しています。

石ケ原古墳跡に整備された、九州大学伊都キャンパスイーストゾーン。
建物の最上階には遺跡展望室が設けられ、駐車場の間には石室が復元された。

歴史学とはどんなものか

清水　和裕（イスラム文明学）

私たちは、なぜここでこうやって生きているのだろう。人文科学が常に求める問いに、歴史学は「時間」の軸から迫っていこうとします。日本人が「日本人」と呼ばれるようになったのはいつからなのだろう。そもそも「日本人」「中国人」「アラブ人」とは、誰のことなのだろうか。私たちがふだん当たり前のように思い込んでいることひとつをとっても、実は答えは自明ではなく、極めて複雑な歴史を持っています。歴史学は、そういった「当たり前の思い込み」をひとつひとつ丹念にとらえ、「当たり前」が生まれてきた経緯や状況を明らかにし、その理由に答えようとしています。

例えば中国、エジプト、イギリスといった世界各地の人々が、千年まえに、どのような社会に生きていて、何を考えて町を歩き、何をたべておいしいと思っていたか。そんなことを明らかにするのは並大抵のことではありません。しかも、そういった人々の日々の営みが、いま現在の私たちの世界を生み出したのです。**現在の私たち、現在の世界の隣人たちの事を知るには、過去の私たち、過去の彼らを知る必要があります。**

大学の歴史学の講座では、それぞれの学生が自分なりにそのような「なぜ」「どのように」を見つけて、先人の研究成果と取り組み、また過去の史料と直接むきあって、その答えを探し求めています。そのために、古い草書体の古文や、漢籍、また韓国語、アラビア語、ドイツ語、ラテン語など様々な言葉を駆使して、外交文書や日記、年代記、地理書、宗教文書や法令集、果ては文学作品などの原典史料と格闘するのです。

史料をひもとき、先人の研究の蓄積を読み進め、自分の解き明かすべき問題を見つけ、そして答えを手に入れる。そのなかで、遠い時代のある社会に生きていた人々が、何を考え、感じていたか。そして、それはどういった時代の流れを生んでいったのか。そういった謎が少しずつ明らかになっていくのを感じることでしょう。

イスタンブルのアヤソフィアの姿からは、ビザンツ帝国の大聖堂とオスマン帝国のモスクのふたつの歴史を見ることができる。

知的冒険のすすめ

文学作品を読み解く作業には、予想を超えた困難がつねにともなう。
しかしそれを克服して得られる発見の悦びは深く、筆舌に尽くしがたい。
対象となる文献も研究の方法も多種多様であるが、文学の研究とはこのような悦びを共有する、
きわめて実践的な学問なのである。

テクスト校訂の醍醐味

髙木　信宏（フランス文学）

文学の研究には、書物の校訂というものがある。古典などの本文を、異本と照らし合わせて厳密に訂正する仕事である。中世の写本ならばともかく、出版文化が興隆する近代以降の書物であれば、このような作業は不要と思う向きもあるかもしれない。だが、現代の文学を扱う場合でも、校訂者が困難に直面することはままあるのだ。

たとえば、名うての難題としては、20世紀フランスの文豪マルセル・プルーストが上梓した『失われた時を求めて』の事例が挙げられる――「そのとき叔母は、蒼白く生気のない哀れな額を私の唇のほうに差しだすのだが、朝のこの時刻ではまだかつらの毛を整えていないので、額のうえにはまるで茨の冠のとげや数珠（ロザリオ）の玉のように椎骨が浮き出ていた」。これは同長編小説の第1篇『スワン家のほうへ』に登場するレオニ叔母の描写であるが、脊柱を形成する「椎骨」が額に浮き出ることなど、解剖学的にはありえない。プルースト自ら校正した1913年刊行のグラッセ初版以降、この奇妙な記述は各版に受け継がれていくのだが、その間に文言の是非を問う研究者の議論は白熱し、1987年にガリマール社から出されたプレイアッド新版では、ついに斯界の泰斗ジャン＝イヴ・タディエが果断にも元の本文を常識的な表現に訂したのである。つまり「額」ではなく、「かつら」から「椎骨」状のものが覗いているというように。

しかし、これで問題は決着を見たのではなかった。面白いことに、近年の草稿調査にもとづく再検証によって、いまや本来の表現を是とする説が優勢になりつつある。

もちろん、こうした話は『失われた時を求めて』だけに限らない。**ふだん読んでいる名作の一言半句も、じつは研究者の地道で綿密な校訂の作業を経て活字になっているのだ。**さて、皆さんにも、現代文学の最高峰に数えられるプルーストの傑作を味読しながら、この箇所に込められた作者の真意について考えてみて欲しい。

◀ 出典：プルースト『失われた時を求めて』（吉川一義訳）、岩波文庫、2010年

メールヒェン研究「水の女」の物語

小黒　康正（ドイツ文学）

ヨーロッパ文学における「水の女」の系譜は、古代ギリシア神話を水源とする。もっとも、ホメロス『オデュッセイア』に登場したセイレンは、古代末期以降、キリスト教のもとで姿を変えていく。もはや「美しい声」で誘惑する半人半鳥ではなく、「美しい姿」で誘惑する半人半魚へと変容するのだ。その後、「水の女」の系譜は、中世やルネサンス期の民間伝承や民衆本を経た後、近代ドイツのメールヒェンにて川幅を広げ、更にデンマークへと至り、世界文学という海原に流れ出ていく。

こうした流れの中で、近代ドイツ文学の役割は大きい。「美しい声」と「美しい姿」を併せ持つウンディーネ、メルジーネ、ローレライがたえず姿を現すからだ。セイレンの後裔（こうえい）たちは、明るい海原ではなく、奥深い森の湖沼に現れるようになると、文学において内面化された「他者」と化す。「水の女」の系譜は、近代ドイツ文学において、「未知なる他者」のみならず、「未知なる自己」をも取り込みながら、「水の深さ」が「心の深さ」となる現代的な「他者」経験を問題にしていく。

近代ドイツ文学の新たな潮流は、デンマークのアンデルセンに多大な影響をもたらす。そのとき最初に成立したのが、『人魚姫』（1837年）であった。但し、この物語は、「美しい声」の喪失物語として、「陸の男」と「水の女」の言語的意思疎通の破綻を三重に描く。海上であれ、陸上であれ、空中であれ、両者の言語的断絶は深い。「美しい姿」の人魚姫が「美しい声」を失うことの意味は、あまりにも大きいのだ。

その後、『人魚姫』が逆にドイツ文学に多大な影響をもたらす。現代ドイツ文学において、言語による意思疎通の破綻は先鋭化が進み、しかも既存の言語が原理的機能不全に陥っていく。但し、このような絶望的状況のもと、新しい文学の模索が始まる。「水の女」の物語は、既存の世界にいる私たちに、新しい男女のあり方、新しい言葉、「どこにもない場所」の模索を促す。私たちは今、新たな大海原の前にたたずむ。

文学は「ユートピア」である。

▲紀元前370年頃のセイレン像
（ギリシア国立アテネ考古学博物館蔵）

▲ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス『人魚』
（1900年）

過去のことばを再構する

言語の歴史を再構するには、過去の文献資料を用いる必要があります。
しかし、文献資料に現れた例を年代順に並べるだけでは、言語史にはなりません。
当該の文献資料は、どのようにして作られ、どのような言語が反映しているのか。
文献資料に透けて見える、当時の話しことばを繋ぎ、言語史を構築していきます。

ことばの歴史を探ることで、
ことばの仕組みを知り、
人間の営みを学ぶ。

青木　博史（国語学）

図1：『竹取物語絵巻』（九州大学附属図書館蔵）

(1)今は昔、竹とりの翁といふ者ありけり。

この1文は皆さんご存知の通り、有名な『竹取物語』の冒頭です。現代語に訳すと、以下のようになるでしょう。

(2)今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

現代語訳は、古典語を現代語に置き換える作業です。そのままでは理解できないことばを、理解できることばに置き換えているわけです。しかし、考えてみれば、両者は同じ日本語です。したがって、(1) と (2) の相違は、**時間を経て日本語が変化した**ことを示していることになります。

まずは述語の部分に注目してみましょう。「ありけり」は「いた」に変わっています。現代語では、モノが“存在する”ことを表すときには「ある」を使いますが、ヒトが“存在する”ことを表すときには、「ある」でなく「いる」を使います。しかし、どうやら古典語では、ヒトの場合も「あり」を使ったようです。だとすると、いつ、どのようにして「あり」は「いる」に変わったのでしょうか。――こうして、**ことばの歴史的研究**はスタートします。

確かに、現代の我々からすると、ヒトに「ある」を使うのはおかしいと感じられますが、昭和時代の文献を見ると、ヒトに「ある」を使うこともまま見られます。

(3)むかしむかし、あるところに爺さんと婆さんがあった。
（『日本昔ばなし』）

ただ、どんな場合でも使うことができたわけではなく、「昨日は1日中家にいた」という場合は使えません。どういう条件があったのでしょうか。

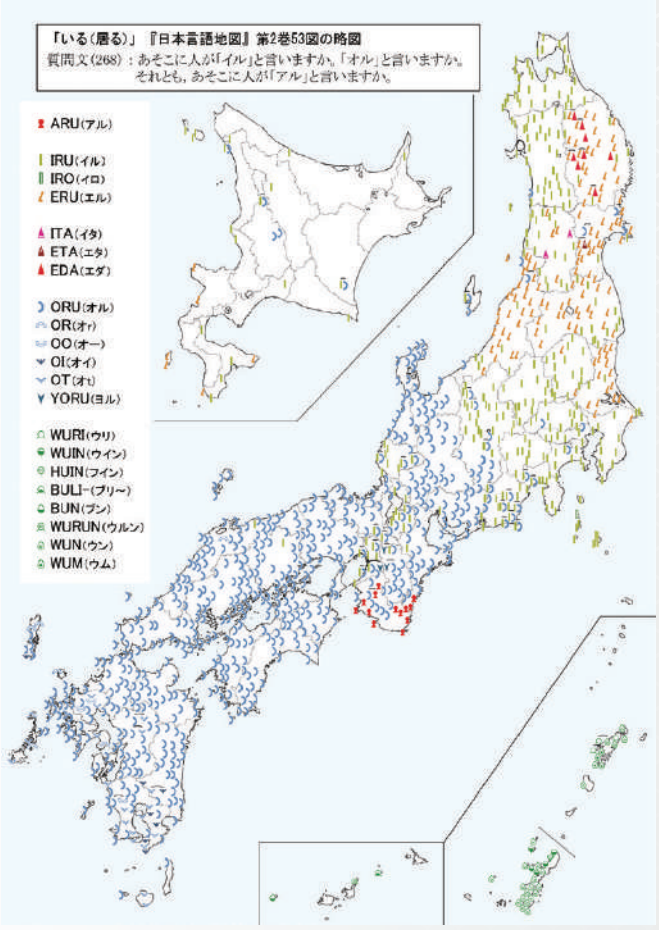


図2：「居る」を表す方言の全国分布（東西対立型）

また、九州をはじめ、西日本方言では広く、ヒトが“存在する”ことを表すときには、「おる」を使います。

(4)竹取の翁という人がおった。

時間的な変化に加え、空間的な変異も視野に入れると、“存在”表現は「ある」「いる」に加え、「おる」も仲間に入ってきます。なぜこうした歴史的変化が見られ、なぜこうした地理的変異が見られるのでしょうか。

こうして我々は、**“いつ、どのように”という疑問からさらに進んで、“なぜ”という疑問へ**と進みます。さらに、(1)と(2)の相違をめぐる“なぜ”は尽きません。「ありけり」は「あった」と訳されるように、「けり」は“過去”を表します。しかし、古典語において“過去”を表す語としては、「き」があったことも我々は知っています。また、“過去”とは異なる“完了”を表す「つ」「ぬ」があることも知っています。しかしながら、これらは現代語訳ではすべて「た」です。この相違は何を示すのでしょうか。歴史的変化だとすれば、「き」「けり」「つ」「ぬ」はすべて「た」に取って代わったことになるのでしょうか。では、いつ、どのように、そしてなぜ、そのような変化が起こったのでしょうか。

またさらに、「…という者がいた」のように、(2)には主語を表す「が」がありますが、(1)にはこうした「が」がありません。これは偶然書き忘れたのでしょうか、それとも古典語には主語を示す助詞がなかったのでしょうか、主語の「が」は新しくできたのでしょうか。だとすれば、それは、いつ、どのようにして、なぜ？——

このように、ことばの歴史をめぐる“なぜ”は尽きません。重要なことは、いま使っている現代語、共通語にしても方言にしても、**歴史の中の1コマ**であり、常にその変化の最中にあるという点です。ことばが新しく生まれ、広く通用し、またあるものは使われなくなっていく。こうした**歴史的展開の中でことばを理解することこそが、ことばの仕組みを知ること**だと私は思います。

そして、このように、ことばを自在に使ってコミュニケーションを図ることができるのは、人間のみです。**ことばの歴史を説明することは、人間の営みの歴史を説明すること**に他なりません。国語学講座では、我々にとって最も身近な、日本語を対象として研究しています。「ことば」を通じて、人間の本質とその営為を、共に探求していきましょう！

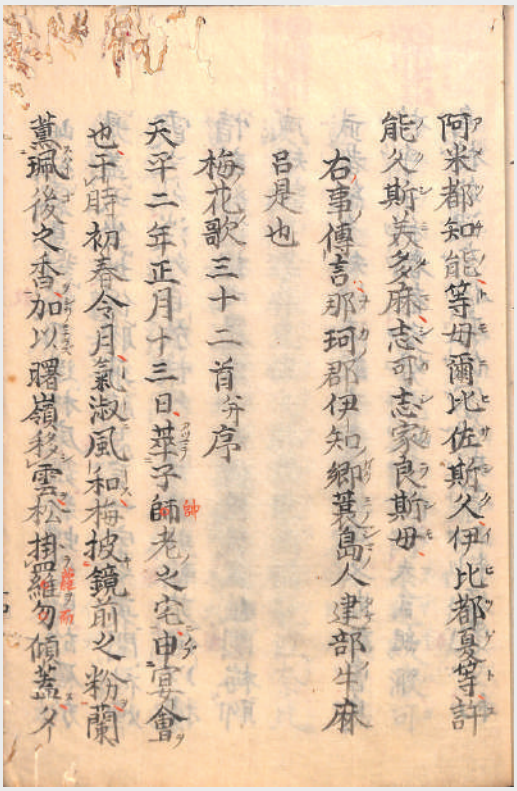


図3：『萬葉集』（九州大学附属図書館蔵）

はじめの一歩

いま、目の前に生きている人を研究するのが人間科学コースの特徴になる。
これまで「同じ人間」と見ていた人が、実は全く異なる世界の認識をしているかもしれない。
これまで「まるで違う」と思っていた人が、実は自分とそっくりな世界を生きているかもしれない。
今自分が生きているこの世界で、よりよく生き直すには、そのアプローチ（接近法）を学んでゆくことからはじめよう。

身を重ねてみる

飯嶋　秀治（比較宗教学）

かつてゲーテは「外国語を知らない者は自分自身の言語について何も知らない」と書いたことがあった。外国語を知って初めて、自分自身の言語についても自覚できるようになる。逆に言えば、外国語を知るまで、それ以外の言語は知らないのだから、自分が他にもあり得た言語の1つを話しているのだと自覚することもない、ということであろう。これは言語だけのことではなく、人生そのものにも当てはまるだろう。**「他の人生を知らない者は自分自身の人生について何も知らない」**。比較宗教学はこの「他の人生」を学ぶ場である。

研究室では時たま、中庭に出て「ブラインド・ウォーク（Blind Walk）」というレッスンを行うことがある。眼を瞑り、中庭を歩いてみるのである。このレッスンをやる前、多くの学生たちは、眼を瞑ってしまえば、何も見えず、動けなくなるに違いないと思って驚く。けれども、眼を瞑ると分かる。どちらの方向が明るいのかは知ることが可能なのだ。中庭からは木々の葉がこすれる音がする。そちらの方向に一歩踏み出せば、頬には風が当たり、どちらが外なのかも分かる。季節が季節なら、花の香りがしてくるかもしれない。こうして私たちは知るのである。ブラインドになって、現われてくる世界もあるのだということを。眼を瞑っても、世界が失われる訳でもなく、様々な光の風景、音の風景、風の風景、香りの風景があり、私たちはそうした世界を生きることも可能であったということを。そうして私たちは、**目を瞑る前の自分が一つの思い込みの世界に住んでいたこと、別様の世界に住むことも可能であること、「自分自身の人生」はその可能性の一つの世界でしかなかった**ことを知るのである。

だから私たちの研究室では、様々な当事者に**「身を重ねてみる」**。異なった時代の、別の世界に生きた人間たちの書物を読み、異なった境遇に生きる人たちの暮らす現場に出かけ、そこに住む人たちに「身を重ねてみる」のである。するとその人生は二倍にふくらむ。向こう側の世界と、こちら側の世界を知り、その行き来ができるようになる。少し前まで、自分自身もそうしていた、「思い込み」の世界に住んでいた人々に、もう一つの世界のあり方も可能であることを伝えることができる。「宗教」というのはそうした「もう一つの世界のあり方」の1つでしかない。けれどもそこには、長年、多くの人々が苦悩から解放された知恵が累積している「もう一つの世界のあり方」があるのである。では身を重ねることでどこまで接近できるのだろうか。と考え始めたあなたは、もう一歩を踏み出したのである。

平凡と思われた道草にさえ
『身を重ねてみる』ことは可能だ

認識のあり方

なぜ人は見間違いを起こすのでしょうか。
なぜ無意味な模様に意味を見出すのでしょうか。
その背後にあるこころの働きを考えてみましょう。

意味を見出すこころの仕組み

山本　健太郎（心理学）

あなたは幽霊の存在を信じますか？このような問いを投げかけられると、おそらく多くの人は非科学的だと否定するでしょう。しかし一方で、霊を見たという報告は非常に多く、現在でも後を絶ちません。もちろんこれらは思い込みであったり、偽物であったりというケースがほとんどです。とはいえ、じゃあやっぱり幽霊は居ないんだ、と思考を止めてしまうのではもったいないかもしれません。もし実際には居ないとしても、「ではなぜ幽霊を見たと感じるのか？」という問題は残ったままであり、そこから**人のこころの本質に迫ることができるかもしれない**からです。

図1は、NASAのバイキング1号が1976年に撮影した火星表面の写真です。よく見ると、中央の上方に人の顔のようなものが写り込んでいます。この写真が公開された当時は、火星人の遺跡ではないかといった憶測を呼んだそうですが、実際はくぼみや影がたまたま顔の輪郭やパーツの配置と重なってそう見えるだけで、高解像度のカメラで撮った最新の写真ではただの岩山であることが示されています。しかし、そうはわかってはいながらも、人の顔っぽいという

図1：火星の人面岩（Face on Mars）

印象をぬぐい去ることはなかなかできません。どうも私たちは無意味なパターンにも、何かしらの意味を見出す性質を持っているようです。

同様の性質は、星空を見たときにも感じ取ることができます。例えば月の表面に見える影の模様は、実際には無意味なパターンですが、日本では餅つきをするうさぎの姿として見立てられています（図2）。また無秩序に配列されている星をつなげて、さまざまな星座を思い描くこともあります。興味深いのは、このような形で秩序づけられたパターンは、元の無秩序なパターンよりも把握しやすく、記憶にも残りやすいということです。私たちの脳は、ばらばらな要素をまとめて全体として捉えることで、**ものごとを効率良く処理しようとしている**のかもしれません。

また人は特定の配置パターンを、「顔」として素早く処理してしまう性質があるようです。図3は、どちらも同じ要素（四角と丸）で構成された単純なパターンですが、左側の絵のみが自然に顔として認識され、強く注意が惹かれます。しかもこの性質は、生後1年未満という幼い時期から生じることも研究で示されています。顔を素早く検出することは、他者に反応したり表情を読み取ったりする上で非常に重要です。そのため、目や口といった特定のパーツの配置情報から、顔を自動的に認識するような仕組みが生まれながらに備わっているのかもしれません。その副作用として、私たちは意味の無い類似パターンにも顔を見出してしまうのではないでしょうか。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という有名な句があります。幽霊だと思って怖がっていたものが、よく見ると枯れたススキであったという話です。この言葉にも、人が恐怖心や思い込みから何でもないものに意味を見出してしまうという性質がよく表されています。**人の認識は一様ではありません。**そこには、過去の経験や周囲の状況などのさまざまな要素が複雑に絡み合い、影響を及ぼしています。どのような情報が人の認識を定めるのかについて、皆さんもぜひ一緒に検証しましょう。

図2：月の表面に見えるうさぎ

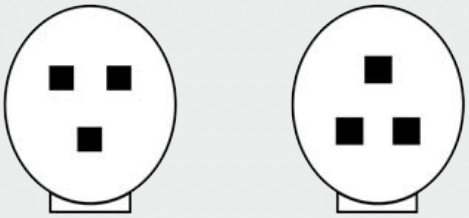


図3：同じ要素で構成される二つのパターン

在学生からのメッセージ

桑木野 哲平

専門分野：倫理学
出 身 校：城南高等学校（福岡県）

倫理学って何だと思いますか？高校で「倫理」の授業を受けた方もいると思いますが、これはいわゆる「哲学史・思想史」が主な内容です。一方、倫理学と一般的に呼ばれるものは①メタ倫理学、②規範倫理学、③応用倫理学に大別されます。九州大学ではこれらに加え、思想史や比較思想など幅広く学ぶことができます。研究室は和気あいあいとした雰囲気で、同期でもよくUNOで大いに盛り上がっています（笑）。

九州大学でできることは勉学だけではありません。私は九大フィルハーモニー・オーケストラというサークルに所属しています。ここでは、管弦楽を通して自らの表現を磨きながら、大切な仲間とともに日々楽しく活動しています。好きなことに全力で打ち込めるのは、大学生の醍醐味ですね！

後小路 蒔子

専門分野：日本史学
出 身 校：筑陽学園高等学校（福岡県）

みなさんは「歴史学」と聞いて、どのような学問を想像するでしょうか。中学や高校で学ぶ世界史や日本史などの「歴史」の授業を想像する人がほとんどだと思います。私も高校までに習った日本史が好きで、日本史学研究室に入りました。しかし高校までで学ぶ歴史と、大学での歴史学はやや違うように感じます。高校までの歴史は教科書に載っている人名や事項を暗記することが中心だと思いますが、大学では暗記をすることはほとんどありません。では、歴史学とはどのような学問なのか。イタリアの歴史哲学者クローチェは「すべての歴史は現代史である」とし、イギリスの歴史学者E・H・カーは「歴史とは過去と現在との絶え間ない対話である」としています。すなわち現在の視点に立って史資料から過去を分析し、事実の認定や解釈を繰り返すことで、歴史像を構築する学問だと言えます。ここでは大きな事件でなくても関心をもったことは何でも研究対象となり得、また信頼度を担保できるものであれば、文献史料に限らず口頭伝承や絵画、映像など様々なものを史資料として用いることができます。そしてこのように「過去を問い直す」ことは、いくつもの過去の積み重なりのうえにある「現在」を問うことにつながり、その意味において歴史学は現在と密接な関係を持つものであるといえます。

2020年は新型コロナウイルスの流行により世界が大きく変化した年でした。このような状況下で私自身、日本史学と現代のつながりを実感させられた1年でした。1940年の東京オリンピック中止と2020年の東京オリンピック延期、戦時下の「不要不急」の旅行の自粛要請や国民の相互監視とコロナ禍の「不要不急」の外出自粛や「自粛警察」の出現。コロナ禍における様々な出来事は戦時下とリンクし現在に多くの示唆を与えているように感じました。過去の出来事の原因や結果、そしてその位置づけについて考えることが、コロナ禍で先の見えない現在、私たちはいかに行動し、どのような未来を目指すのか考える手助けとなるのではないでしょうか。

このように大学での「歴史学」は暗記ではなく、現在から過去を解釈していく学問です。そこには難しさもありますが、その分多くの楽しさを味わうことが出来ます。高校まで歴史が好きだった方もそうでない方も、大学での「歴史学」に興味を持ち、日本史学研究室を訪れていただけると嬉しいです。

山本 悠太

専門分野：地理学
出 身 校：小倉高等学校（福岡県）

地理学研究室には、「巡検」と呼ばれる現地を歩く地域調査（実習）などの研究室行事があります。写真はその「巡検」の際に、対象地域について調べたこと（この時は大野城市におけるため池の機能の変化について）を発表している時のものです。また、研究室は普段から資料を探したり課題に取り組んだりする場としても使われます。作業の合間に雑談を楽しむことも多く、居心地の良い場所です。3年生になって授業数は1，2年の時より少し減りましたが、地理学系の授業を中心に、心理学や言語系の授業も取っています。課外活動としては、ギターのサークルに所属し、売店のバイトなどもしています。高校生のみなさんにはご自身の興味のある分野を専攻し、充実した大学生活を送ってほしいと思います。応援しております。

大野 奈美

専門分野：独文学
出 身 校：倉敷青陵高等学校（岡山県）

何も分からず頭を抱えながら時間割を組んでいた入学当初、「よくわからないけど、いろんな小説を扱ってておもしろそう」と思って受講したドイツ文学講義が、私の専攻を決めるきっかけになりました。第二外国語はフランス語だったので、研究室に入った当初はドイツ語の読み方すら知らないという状況でしたが、院生の先輩方の助力のおかげで、今ではドイツ語での授業も受けられるようになりました。ドイツ語のテキストを読むのは大変な時もありますが、先生方の熱の入った授業を受けていると、原文で読むことのおもしろさがわかってきます。また、独文学研究室では自分の研究テーマを自由に決められるので、それぞれのテーマについて話すのも研究室での楽しみの一つです。

後藤 圭佑

専門分野：比較宗教学
出 身 校：熊本高等学校（熊本県）

私が入学したての頃、文学部のオリエンテーションで「文学部にはここでしか学べないことがある」といわれたのをよく覚えています。当時はあまりピンとこなかったのですが、3年生になった今その言葉を強く感じています。文学部には、他の学部に比べ特色のあるコースが数多くあり、私が所属する比較宗教学研究室もそのうちの一つです。研究では、研究室の外に出て自分の知らない人たちに、インタビューや仕事の観察を行います。相手の視点から世の中を捉えることはまさしく、教科書的な知識を超えたそこでしか得られない貴重な“学び”です。もし縁があれば、受験生の皆さんも文学部に進学し、ここでしかできない“学び”に出会うことを期待しています。

九州大学 周辺地図

九州大学文学部へのアクセス

空 路 ○福岡空港→（地下鉄空港線）→「姪浜駅」（JR 筑肥線へ乗換）→「九大学研都市駅」→昭和バス→「伊都キャンパス」
※西唐津行き、筑前前原行きに乗車した場合は、姪浜駅での乗り換えは不要。
○福岡空港→（地下鉄空港線）→「博多駅」→西鉄バス→「伊都キャンパス」

ＪＲ ○「JR 博多駅」→（地下鉄空港線）→「姪浜駅」（あとは空路の場合と同じ）
○「JR 博多駅」→西鉄バス→「伊都キャンパス」

西 鉄 ○「西鉄福岡駅」→（地下鉄空港線）→「姪浜駅」（あとは空路の場合と同じ）
○「西鉄福岡駅」→西鉄バス→「伊都キャンパス」

高速バス ○天神バスセンター→（地下鉄空港線）→「姪浜駅」（あとは空路の場合と同じ）
○天神バスセンター→西鉄バス→「伊都キャンパス」

九州大学文学部

文学部パンフレット 2021年度
発行日／2021年7月13日
発行者／九州大学文学部 文学部長 清水 和裕 編集者／文学部広報委員会

問 合 せ 先 〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学人文社会科学系事務部 教務課（文学部担当）
TEL. 092-802-6372（ダイヤルイン） FAX. 092-802-6396
E-mail: jbkkyomu1lt@jimu.kyushu-u.ac.jp
ホームページ https://www.kyushu-u.ac.jp（九州大学） https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp（文学部）